

白蛇様の婿入り婚 恋を煎じて、愛を呑む。

あぐつ Agutsu



アルファポリス文庫

序章

桜舞い散る春。文化が花開き、異国情緒が混合する時代。
商店街の一角に鎮座する漢方屋・矢尾板堂^{やおいだんどう}では、厳かな祝宴が行われていた。
古い井草^{いぐさ}が香る奥座敷。床の間には結納品^{ゆいのうひん}が並ぶ。
新婦である菜佳^{さいか}は、銚子^{ちようし}を手にとった。

片手で袖を押さえながら、隣へと腕を差し出す。

「橙司^{とうじ}さま、どうぞ」

隣に座る五つ紋付^{いつもんつき}の羽織袴^{はおりはかま}を着た男は、手元の盃^{さかずき}を掲げた。

「かたじけない」

白嵯橙司^{しらさおとうじ}。この度、菜佳^{さいか}が迎え入れた婿養子である。

その容姿は異国人を思わせるようで、鉛白^{えんぱく}の髪に、琥珀^{こはく}の瞳だ。彼は緊張した面持ちで盃の酒を飲んでいる。

下町の商家の娘である菜佳^{さいか}は、妖族^{よみぞく}と婚姻をした。

妖族——平安時代に妖怪と人間が交わった種族。その子孫が、この時代において社会的地位を確立させていた。妖族は祖先の妖から類い稀な才を受け継いでいる。

白蛇を祖とする白晝家には、目利きの才が備わっており、その才を用いて貿易商として名を馳せていた。菜佳の夫となる橙司もまた、妖族、白晝家の一人。

そんなことを考えながら、菜佳は自身が纏っている、臙脂に手鞠柄の振り袖の襟を直す。この振り袖は今は亡き母の物だった。

そして居心地の悪さに唾を飲み、両家の親族が座る席へ顔をあげた。

目に映るのは、橙司の父である弥勒に、菜佳の父である勇がお酌をしている姿だ。愛想の良い笑顔を振り撒く父に反して、弥勒は仏頂面で注がれる酒を見つめている。

その光景に心の中で溜め息をついた。

白晝家は母も兄二人も皆揃って、この婚姻に関心がないように思えたのだ。祝いの席だというのに、一度たりとも微笑まず、厳肅な態度を崩さない。息子の晴れ姿にも見向きもしていないようだった。

良家といえども、ここまで厳肅にしなければいけないのか。もっと柔らかな目に向けてやれば良いのにと、菜佳は密かに思う。

新たな門出を祝うには、あまりにも静かすぎるのだ。

ふと隣へ視線を向けた。整った横顔を見つめていれば、橙司と視線が交差する。

彼は目尻を下げ、こちらに微笑んだ。初めて顔を合わせたときと同じように、柔らかな表情を見せたのだ。

胸の奥が微かに揺れた。慌てて視線を逸らすも、僅かに頬が熱くなるのを感じる。

その微笑みは、菜佳の不安を少しだけ和らげた。

この先の幸せな未来に期待を寄せて。

これは今まさに祝言をあげる若い男女が、本当の夫婦になるまでの八カ月のお話。

第一章

都市の近郊には人力車じんりきしゃと路面電車が行き交う。

水路の脇には桜の木々が咲き乱れ、水面は桃色の花卉が流れゆく。

店が軒を連ねる商店街。老舗漢方屋・矢尾板堂では、齡十九となる一人娘の矢尾板菜佳に縁談の知らせが届いた。

店の奥座敷にて、菜佳は父を前にし、目を丸くする。

「白寄家との縁談ですか？」

菜佳の父である矢尾板勇は腕を組み頷いた。

「二十四歳だそうだ。どうだ菜佳、いい話じゃないか」

思いもよらぬ縁談に、菜佳の胸は明るく灯る。

白寄家——この町一番の名家だ。貿易商の家業を担っている。

そして矢尾板堂を鼻ひにしてみらっていた。

勇は組んだ足に肘を乗せ上半身を倒す。その顔には笑みを浮かべていた。

「聞いて驚くなよ……婿養子にくるんだ！ この矢尾板堂を継いでくれるってな」

「まあ——と菜佳はさらに目を大きく見開く。これほどの良縁はない。

しかし菜佳はふと思う。

「でも父さん。白寄の御息は二人で、どちらも婚姻されていなかった？」

すると、勇は目を泳がせ咳払いをするのだ。

「実は白寄家には三男がいてな」

「三男？ 聞いたことがないけど」

菜佳は怪訝な顔で首を傾げる。白寄家は二人兄弟のはずだが——

「ほら、あれだ……三男坊は控えめなんだよ。だから表に出ていなくてな。本家の家業は長男が跡を継ぐというし、三男坊には下町でのんびり暮らしてほしいんじゃないか？」

父の挙動を不審に思うも、理由はどうであれ、婿入りなど思ってもないことだ。

（矢尾板堂は白寄家の後ろ盾があれば安泰。父も喜んでくれる。矢尾板の娘として、ここは——）

老舗漢方屋・矢尾板堂の子は菜佳のみ。男子がおらぬので、家業の存続には婿を迎えるしかない。矢尾板の血が流れているというのに、女では家督かどくを継げないのだ。自分が男であればと、何度考えたことか。

漢方医学は衰退の兆しにある。明治より西洋医学が台頭したからだ。

西洋医学が重宝されるようになり、漢方は医学から外されてしまった。

『いずれ歴史から消え去る漢方屋に、誰が婿入りなどするものか』と、婿養子に手あげる者はいなかったのだ。

だからこそ、この縁談を断る理由など、菜佳にはない。

自らの意思で婿を選ぶ余裕もなかった。それを不自由だとは思わない。菜佳にとって、恋愛ごとよりも、店の存続が何よりも大切なことから。

菜佳は皺の入った大きな父の手を握る。それから真つ直ぐに目を見据えた。

「お父さん……このご縁、わたしに務めさせて下さい」

——かくして、菜佳と白寄家三男との婚姻が決まった。

数日後に夫となる男が矢尾板堂へやってきた。

「白寄橙司と申します」

暖簾をくぐり抜け現れた男に、菜佳と勇は小さな感嘆の声をあげる。

「これは、これは……立派な方だ」

勇は頭の前からつま先まで橙司を見やる。菜佳も橙司の容姿に目を引かれていた。

(綺麗な人……)

淡雪のように白い肌。鉛白の髪色に、琥珀の瞳。紺色の着流しが、青年の色白さを

際立たせていた。

「菜佳、ご案内しないか」

父の声にハツとなり、つい見惚れていたことに気がついた。

菜佳は橙司を店の奥へと案内する。

矢尾板堂の奥。古い井草香る八畳間の座敷にて、橙司は姿勢正しく正座していた。

「それでは後は、お二人さんで」

勇は菜佳と橙司の顔を見比べ、そつと襖を閉めていった。

緊張が走り、静寂が漂う奥座敷。菜佳は畳に指先を揃える。

「白寄さま、よくお越し下さいました」

それから深々と頭を下げた。

「改めまして、矢尾板菜佳と申します。この度はご縁をいただき、誠に嬉しく思います」

菜佳が顔をあげれば、橙司は強張った表情で、ぎこちなくお辞儀をする。

「……こちらこそ、お手数をお掛けしますが、どうぞよろしくお願いいたします」
控えめな声が返ってきた。

(緊張なされているのかしら)

菜佳は不思議に思う。

名家の白寄家。その御子息だというのだから、さぞ厳格な殿方だろうと想像していた。しかし橙司は物腰柔らかで腰が低い。笑いもしなければ、引き締めた顔もせず。どこか哀愁漂う青年だ。

菜佳は急須を持ち、空の湯呑みへ注ぐ。淡黄色の茶が注がれた。

指先を震わせながら、湯呑みを橙司の手前へ差し出す。

「こちらは生姜、桂皮、陣皮の茶です。体を温める効能が御座います。お口に合えばよろしいのですが」

自身の声までもが微かに震えてしまう。

橙司は物珍しそうに湯呑みを覗く。

「いただきます」と控えめに言うと、湯呑みに口つけた。一口飲めば僅かに目が開く。

「これは……美味しいですね」

菜佳は安堵し笑顔を咲かす。

「それは良かったです！ 体の冷えに良く効きますから、うちは春や冬になると飲むのですよ」

「……なるほど。日頃から生薬を飲んでいるのですね。流石は漢方屋といったところでしょうか」

ふと橙司の表情が緩んだように感じた。

障子窓の向こうから春の陽気が差し込み、人々の喧騒が聞こえてくる。

「ここは賑やかですね。女学生の話し声や、子供たちが走りまわる声が聞こえてきます」

橙司がそう言うので、菜佳は耳を澄ませてみる。

「……」

だが聞こえてくるのは騒めきだけ。橙司が言うように誰の声なのか、なにを話しているのかまでは聞き取れない。

（妖族だから耳がいいのね。わたしが聞こえない声も聞こえているんだわ）

平安時代、妖怪と人間の間に生まれた妖族という種族。

今ではほぼ人間の血ではあるが、妖怪から受け継いだ特筆した『才』を持っている。白寄の祖先は白蛇。一族は目利きの才に優れており、その才を活かして貿易商を営んでいるのだ。この地では白寄の人間に親しみを込めて「白蛇様」と呼んでいた。

そのようにして、妖族は才を活かした事業をしている家系が多い。それゆえ、この時代では社会的地位が高いのだ。

それから、妖族は決まって五感が優れている。身体的特徴も強く、白寄家の人間が皆白髪で肌が白いいのは、その血筋のせいでもあった。

茶を啜る橙司へ、好奇心が湧いた菜佳はたずねてみる。

「他になにが聞こえますか？」

橙司はきょとんとするも、まぶた瞼を閉じて耳を澄ます。

菜佳は息を殺すように鎮まり、整った顔をじっと見つめた。

「……女学生が喫茶店へ行こうと話しています。子供たちは笑い、ご婦人たちは夫や我が子の話で盛り上がり……それから人力車が走る音、雀すずめの鳴く声……」

そこまで聞き分けられるのかと菜佳は感心した。橙司はそっと瞼を開ける。
「誠に妖族の方は耳が良いですね。鼻や目も良いと聞きます。道の先も見えますの？」

菜佳が聞けば橙司は頷く。

「人より長く先まで見えますよ。いまは……菜佳さんの顔がよく見えますね」

琥珀色の瞳がこちらを見つめている。柔らかく目元を細め、温かな眼差しが向けられた。菜佳は頬を染めると顔を俯けてしまう。

「お、お茶を……もう一杯どうぞ」

菜佳は急須を持ち上げ湯呑みへ注ぐとする。

と、そのとき――

「いいかな、お二人さん」

勇の声と共に襖が開けられた。

「ひゃっ！」

菜佳の体はびくりと跳ねる。

急須で注ぐ茶が湯呑みから外れ、たみ畳を濡らしてしまった。

「ありゃ、これはいけねえ」

勇が座敷へ入ってくる。

「ご、ごめんなさい……！」

慌てて菜佳は布巾で畳を拭いた。けれど茶は畳に染み込んでしまい、その一部が色濃く変色してしまう。

（最悪だ……）

菜佳は耳の端まで赤くし、唇を噛み締めた。とんだ恥を晒してしまった。

「申し訳ねえ、橙司くん」

謝る勇に橙司は「いいえ」と返している。菜佳の視界に橙司の顔が映り込んだ。

「大丈夫ですか。手は火傷をされませんでしたか」

氣遣うように柔らかな声。

菜佳は湿った布巾を握りしめ、そっと頭を持ち上げた。

「……白寄さまの前でとんだ粗相を……申し訳ありません」

「いいんですよ。怪我がないのなら良かった」

橙司は目を細めた。緊張が解れたような、柔らかな表情だ。
(今日、初めて見る顔だわ)

橙司はお盆に湯呑みと急須を並べ、それを持ち上げる。勇は「ありがとうございます。すみませんね、最後まで」と橙司から盆を受け取っていた。

菜佳は初顔合わせを終え、橙司の背中を父と見送る。父の隣でひとつ息を吐いた。

「……不思議な人。妖族の方だと言うのに、わたしの粗相に嫌な顔ひとつしなかった。それどころか、自ら盆を運ぶだなんて」

怪訝な顔をする菜佳の横で、勇はなぜか嬉しそうにしている。

「いい坊ちゃんじゃねえか。白蛇様が婿に来てくれるんだ。ありがてえよ」

そうして拝むように手を合わせ、勇は橙司の背に一礼するのだ。

菜佳は変わった旦那様を迎えることになったと、遠のく背中を見つめていた。



それから結納当日。

開宴から三十分は経っているだろうか。

目の前には矢尾板が用意した祝い膳が置かれている。煮付けにした尾頭付きの鯛、

赤飯、蛤^{はまご}の吸い物。里芋や野菜の煮物、漬け物が並ぶ豪華なものだ。

だが、祝いの席とは思えぬ静けさに、菜佳の箸は進まない。

「菜佳さん」

ふいに名を呼ばれ、菜佳は隣へ顔を向ける。こちらを見る橙司の顔があった。

「どうかされましたか。体調が優れませんか」

控えめに微笑む橙司に、菜佳は首を横へ振る。

「いいえ」と返す菜佳だったが、それを聞きたいのはこちらの方だ。

彼は目立ってはいけないうちでもいうように大人しく。菜佳は不可解だった。

物腰柔らかだった橙司は、どこか萎縮^{いしゆく}するように上座^{かみざ}に鎮座^{ちんざ}している。自分も祝いの主役であるというのに、彼は息を殺すかのように、影に身を潜めていた。

相手方の親族の様子も相まって、菜佳の祖父母も萎縮している様子だ。居心地悪そうに膳を食っている。

父だけは相変わらず、なに食わぬ顔で弥勒に酒を注いでいた。父の明るい声が、雰囲気^{ふんき}にそぐわぬものだと感じてしまうほどに浮いている。

これは異様だ。張り詰めた空気が、和室を包んでいるのだから。

橙司はというと、自分の盃に酒を注いでいた。

「先ほど注いだばかりではないですか」とは口にできず、横目に彼の手元を見つめる。

婚姻とは、もつと温かに祝うものだと思っていた。坦々と過ぎていく時間に、祝いの席という実感が湧かないはまだ。

肅々とした結納を終え、白喜家も矢尾板家を去った夕暮れ。

矢尾板堂の男衆は、玄関で煙草たばこを吹かしている。

縁側でふと息をつく菜佳へ、優しく肩がおかれた。

「大丈夫かい？」

寄り添ってきたのは祖母だ。父方の母である。白髪交じりの頭をまとめ、小柄な体に黒留袖くろとめすてを着ている。

「婚姻は、こういうもののかしら」

菜佳が聞えば、祖母は眉を下げ、菜佳を哀れむような眼差しを向けた。

「さてねえ……妖族様は私たちのような庶民とは違うからねえ。あちらの奥様も息子たちも喋りやしなかった」

冷めた祝賀だったのは確かである。

たとえ格式高き白喜といえども、可愛い息子の晴れの席くらい、笑顔で見届けてやれば良いのに。あれでは祝福された気がしないだろう。

盃の酒ばかり見つめていた橙司の横顔が、頭から離れない。哀愁漂う表情からは、

婚姻への前向きさが感じられなかったのだ。

視線を落とせば、頬に皺くちやで温かな手が添えられる。祖母の瞳と視線が合った。

「菜佳、あんたは良い子だよ。できた孫さね。きつとうまくやれる。千桜ちおさんも娘の晴れ姿に喜んでいるだろうね」

穏やかな眼差しに、菜佳の視界は滲む。

「おばあちゃん……」

祖母の細い体を抱きしめると、優しく背中に腕を回された。子供をあやすように菜佳の背中を叩くのだ。

矢尾板堂のため、父のためと白喜家との縁談を受けた。

それが己の覚悟と宿命だと思っている。己が成すべきことなのだ。

（覚悟を決めなければ、矢尾板堂は潰れてしまう）

先祖代々守ってきた矢尾板堂。それを時代の波のせいで失うわけにはいかない。

西洋医学の広がりにより客足も遠のいた。町内の薬種問屋は潰れたという。今の支えはご近所の常連客だ。

生前、母の千桜はよく言っていた。

『矢尾板堂の漢方は体を温めるだけではないの。心も温めるのよ』

矢尾板堂の娘として、店を守り抜きたい。菜佳には確かな使命感があった。

祖母の指が、菜佳の頬を伝う涙を拭う。
「笑いなさい菜佳。お嫁さんがそんな顔をしちゃいけない。笑顔で迎え入れるんだよ」

菜佳は口角をあげ笑顔を作った。

「ありがとう、おばあちゃん。わたし頑張るからね」

祖母の手を握る。皺があつて肌はかさつき、小さいけれど温かな手だ。

目尻に皺を寄せた祖母の笑顔に、硬かった菜佳の笑顔も自然と緩んでいく。

それは穏やかな春の日である。

菜佳は白寄家三男・橙司の妻となった。



翌日、商店街から離れ、菜佳は父と菜舗の丁稚と共に屋敷へと向かつていた。橋を越え、田んぼ道を歩いている。矢尾板堂から徒歩十二分の道のりだ。

菜佳と橙司が住まう屋敷は、白寄家の別邸が用意された。

「白蛇様と結婚なんて、姉さんはツイてますね」

丁稚の三太は、衣類をまとめた風呂敷を背負い、菜佳へ歯を見せて笑う。まだ齡十

の小僧だ。兄弟のおらぬ菜佳にとっては弟のように可愛い。

「そっだね……」

浮かない様子の菜佳に、小箆箆を「棹担ぎながら勇は娘へ視線を向けた。

「心配いらなさい。白寄は、その……白蛇様だから気高いお方なんだ。あれでも弥勒様はお前さんを褒めていたんだぞ。よく働く娘だと、縁談を持ちかけて下さったんだ」

小さな風呂敷を持つ菜佳は、父の言葉にそつと微笑む。

「それなら良いのだけど」

とは言いつつ。心配しているのは白寄家の厳肅さだけではない。

橙司も弥勒や兄二人と同様に、格式高い雰囲気の間違ったならば、そういうものと受け入れていただろう。

だが橙司はどうだ。愁いを帯びた青年ではあるが、名家の子息とは思えない気安さがある。一方で、その柔らかな微笑みとは対照的に、時折薄い膜が張られ、距離を感じさせるのだ。親族と共にいても、どこか孤立していたように思える。

菜佳はまだ橙司の人となりを読みきれず、彼と過ごす日々が想像でしかなかった。脳裏に浮かぶのは、初めて顔を合わせた彼の表情だ。

『人より長く先まで見えますよ。いまは……菜佳さんの顔がよく見えますね』

そう言って自分を真っ直ぐに見つめ返す眼差し。あの眼差しが、菜佳にこれまでにない胸の高鳴りを感じさせたのは確かだ。

僅かに揺れ動いた心を押し殺すように、菜佳は抱えた風呂敷を強く抱きしめた。

「屋敷だ！ 屋敷が見えますよ！」

三太の明るい声に菜佳は顔をあげる。

小さな指の先。周囲は人氣も建物もない場所に、ぽつんと佇んでいる。

「暫く使われてなかった別邸だと聞いていたが、立派な屋敷じゃないか」

勇は嬉しそうである。

（来てしまった……）

果たして自分は、結婚生活を穏やかにやっていけるのだろうか。否、やらねばならない。矢尾板堂の未来がかかっているのだから。

菜佳は深く深呼吸をして、敷地内へ足を踏み入れた。

もう間近に屋敷の前へ来れば、三人は揃って顔を見上げた。ずんと佇むそれを物珍しく眺める。

和洋折衷の屋敷。平屋と洋館がくつついたような仕様だ。左手に二階建ての洋館。右手には平屋が見える。敷地面積は平屋がほぼ占めているだろう。

菜佳には中がどのような形になっているのか見当もつかない。

「さて、入るか」

勇が先頭を行き、続いて菜佳と三太も後に続く。

しかし数歩歩いたところで勇の足は止まってしまった。

菜佳と三太は顔を見合わせ、勇の背中へ声をかける。

「父さん、なにかあった？」

すると父は苦い顔をして二人へ振り向くのだ。

「玄関、どこかな……」

菜佳と三太は呆れて溜め息をこぼす。

「わからないで先を歩いたの……」

勇は照れたように頭を掻いていた。

屋敷の前でそうこうしていれば、ガチャリと鍵を開ける音が聞こえてくる。洋館のドアが開かれた。中年女性が姿を現し、こちらへ視線を送り立っていた。

「ようこそ、お越しくございました。旦那様がお待ちで御座います」

三人は顔を見合わせ、緊張した面持ちで玄関へと入っていく。

最初に目に飛び込んできたのは、木の床と高い天井。

「……すごい」

それ以上に言葉が出なかった。

菜佳が知る語彙^{ごい}では表せないほど、平屋の矢尾板家と違いすぎる。

石畳の広い玄関は何十足も下駄を並べられそう。そこを上がれば冷たい木材の床。すぐ目の前には二階へと続く階段がある。

菜佳は口を開け圧倒されていた。そんな菜佳へ勇の声がかかる。

「菜佳、俺たちはここまでだ」

荷物を下ろした勇と三太。

勇は娘の手を取る。菜佳は父の大きな手の温もりを感じた。

「大丈夫だ、菜佳。お前は俺と母さんの娘だ。母さんの口癖を思い出せ。『漢方は人の心をも温める』お前の笑顔も父さんや三太の心を温めるんだ。今日からは、橙司くんもな」

菜佳は唇を噛み締めた。胸の奥がじんと熱くなる。涙が溢れぬように耐え、それでも父へ笑顔を見せた。

「そう、そうだ菜佳。お前の笑顔は一番の漢方！」

父の笑う声が玄関に響く。つられて菜佳も思わず笑ってしまう。

くいくいと着物の袖を三太が引っ張った。菜佳が視線を下ろせば、三太がニコニコとこちらを見上げている。

「白蛇様が矢尾板堂に仕事しに来るの、楽しみにしてる！」

菜佳は頷き、三太の丸い頭を撫でてやる。形の良い頭が手のひらから伝わるのだ。

その様子を眺めていた勇は三太へ声をかける。

「帰るぞ、三太」

三太の背に手を添えながら、勇は菜佳に背を向けた。扉が閉まるまで、菜佳は父の広い背中を見つめ続けていた。

扉が閉まれば、中年女性^{じゅうねう}は菜佳の前で膝を折る。その場で深々と頭を下げるのだ。

「この屋敷の女中^{じようちゆう}、ハルに御座います。奥様、本日より宜しくお願い致します」

菜佳は慌てて膝を折る。

「こちらこそ、宜しく願います」

頭を下げる菜佳だったが、ハルに肩を触れられ止められてしまう。

「奥様、そのようなご挨拶は結構に御座います。ハルは女中。顔をおあげください」

菜佳は顔を赤くした。

「……はい」

菜佳が立ち上がれば、ハルもその場に立つ。そして片手を奥へ差し示した。

「こちらからお進み下さい。旦那様がお待ちに御座います。荷物はわたくしがお預かり致しますので、奥様は旦那様のもとへ行かれてください」

「はい……」

ハルに言われ菜佳は屋敷の奥へと進む。
(女中さんがいるのね。慣れないわ……)

木の床は冷えている。足袋を履いていてもその冷たさが伝わってくる。廊下を渡った先。大きな襖が開かれており、その一室は洋式となっていた。菜佳には見慣れないものばかり置いてある。

部屋へ入れば、鉛白の髪が見えた。灰色の羽織袴を着た橙司の背中がある。

菜佳の足音に気付き、こちらへ体を向けてくる。菜佳の顔を見るなり、橙司は琥珀の目を細めた。

「よく来たね、菜佳さん」

菜佳は小さく会釈する。夫を前にして緊張が一気に跳ね上がった。

それからしばらくして、菜佳は橙司に連れられ、平屋の廊下を歩いていた。右手には小さな庭が見える。低木や松の木が植えられていた。春の日差しが差し込み、僅かに眩しい。

菜佳は屋敷を案内してもらっているのだ。

洋館は一階が玄関、その奥が応接間。二階は二部屋あり、ひとつは橙司の書斎、もうひとつは空室となっている。

洋館と繋がっている平屋は主生活の場だ。

台所、お風呂場、女中ハルの詰め所、居間――

橙司が次の部屋で足を止める。

「それから、ここが菜佳さんの部屋になります」

橙司の手で襖が開けられると、和室の中は荷物がすでに整理され置かれていた。ハルが持ってきてくれたのだろう。陽当たりの良い綺麗な部屋であった。

「それと……最後にもう一室」

橙司が足を進め、菜佳もその後ろから歩いていく。

菜佳の部屋から少しばかり離れた通路の突き当たりの部屋だ。橙司は襖を開ける。そこは六畳間の和室だった。座卓もなく、床の間にも掛け軸や花瓶は飾られていない。橙司は部屋の空間を見つめながら、なにか口にしづらそうにしていた。

「……この部屋は寝室です」

菜佳の心臓が跳ねる。

(つまりそれって、そういう……)

顔が熱くなってきた。

わかりきっていたことだ。今更なことを戸惑うことがある。

菜佳はそう自分に言い聞かせていた。

「菜佳さん」

橙司の低く落ち着いた声音に、肩はびくりと震える。

「は、はいっ！」

上擦った声で返事した。

「俺は洋館の書斎にいますので、なにかあれば声をかけてください。屋敷の分らないことがあれば、ハルに聞いてくださいね」

「わかりました……」

橙司は深々と一礼すれば、背を向けその場を離れてしまう。

彼の背中を見送り、菜佳は静かな足取りで自分の部屋へ戻ることにした。

陽が差し込む和室。新しい井草の香りがする。矢尾板堂の古い畳の香りではない。自分が新たな地に足を踏み入れたのだと実感させられる。

床の間には美しく生けられた花瓶が置いてあり、掛け軸は水面と竹と菊の花が描かれていた。

（花瓶も掛け軸も高価なもののかしら）

じっと見つめるが、掛け軸の隅にある作家の名前を見たところで菜佳には価値が見当もつかない。とはいえ屋敷の中の全てが高価に思えてきた。

障子を開ければ庭が見える。春風が吹き込み、鳥の囀りが聞こえてくるのだ。

これから新しい生活が始まる。橙司やハルとうまくやっていけるだろうか。矢尾板家に恥じぬよう。白晝家にも泥を塗らぬよう、妻として生きていかねばならない。

菜佳はひとつ息をつく。早々に堅苦しさを感じていたのだった。

（白晝の子息を婿にもらいながら、贅沢を言うものではないわね……）

矢尾板堂を守るための婚姻だ。

橙司が継ぐことで、店の存続が保たれるのならそれでいい――

「奥様、失礼致します」

襖の奥からハルの声がする。

呼ばれ慣れず、違和感を抱えながらも菜佳は「どうぞ」と声をかけた。

襖が開き、正座しているハルは着物一式が入った衣装盆いしやうぼんを部屋へ入れた。一目で上質な物だとわかる。

「こちら、御当主様よりお預かり致しました。奥様の着物に御座います」

菜佳は目を見開く。

「……橙司さまのお父様から？」

結納の席では厳格さを保っていたというのに。このように着物を渡してくるなど思ひもしなかった。

菜佳は盆の手前に膝をつき、着物を確かめる。

紅梅色の衣に梅と草花が繊細に描かれていた。葉の一部は虫食いとして描かれている。品を兼ね備えた上質な友禪。帯は白練色の雲取り菱紋の柄だ。

(これ、加賀友禪だわ)

下町育ちとはいえ商家の娘だ。その程度の知識と教養はある。これは菜佳では到底手に取ることさえ敵わぬ代物だろう。

手にある着物がずしりと重みを増した。それは着物本来の重みだけではない。

『白寄の妻たれ』という意思を感じていたのだ。

「それでは奥様。わたくしは夕餉の支度をして参ります。後ほどお呼びいたしますので、こちらでお待ち下さい」

というたハルは頭を下げ、立ち上がった。

菜佳は着物を衣装盆へ戻すとハルの背中へ声をかける。

「わたしもお手伝いを——」

「結構に御座います」

菜佳の言葉遮るように、ぴしゃりと告げられた。

「これは、わたくしの仕事にございますから。奥様はお待ちください。ここでは炊事、洗濯、掃除もハルが致しますので」

「……それでは、わたしは何をすればいいのですか？」

菜佳が言うと、ハルは困ったように眉を下げた。

「菜佳さま……奥様は旦那様をお支えください」

そう言い残し、ハルは部屋の間を閉めてしまう。菜佳はハルが去った襖を見つめる。和室は水を打ったように静まり返った。

下町育ちで日頃から家事をこなしてきた菜佳にとって『なにもしない』は手持ち無沙汰だ。人に任せるなど、体がむず痒くソワソワしてくる。

(でもハルさんの邪魔をしてはいけないわよね)

菜佳は視線を落とし、着物を眺めた。

これが白寄の妻になるということ——

目の前にある着物が、より一層重く感じられるのだった。

陽はすっかり落ちてきた夕餉の時間。

向かい合う菜佳と橙司の前に御膳が置かれた。

ハルがお櫃の蓋を開けると、ふわりと白い湯気が立つ。艶のある白米が顔を出した。それを杓文字で茶碗によそい、橙司と菜佳の御膳へ渡す。

「それでは、菜佳さん」

橙司は菜佳と目を合わせた。彼が手を合わせるので、菜佳もそれにならう。

「いただきます」と橙司。

「いただきます」と菜佳も後に続いて言う。

菜佳は橙司が食事に手をつけるのを待った。

炊きたての白米が盛られた茶碗を持ち、一口運ぶ。そして味噌汁へ手をつけ、次に橙司の箸は小松菜のおひたしへ伸びる。

見届けてから菜佳も夕餉に手をつけ始めた。

大根と油揚げの味噌汁。小松菜のおひたし。胡瓜きゅうりとカブの浅漬け。どれも塩気が控えめで上品な味つけだ。味噌汁と小松菜のおひたしは出汁だしがよく効いている。

（これが白身家の味なのかしら。わたしが食べてきた味と違うわ……）

着物といい、食卓といい、圧倒的な格差を身に沁みて感じさせられていた。

ハルの作った夕餉を食べ終えた後。

橙司が風呂へ向かう前に菜佳へ声をかけてきた。

「菜佳さん。菜佳さんの部屋に布団を敷いてもらうので、貴方はそちらで寝てくだ
さい」

「——え？」

菜佳は素っ頓狂とんきやうな声をあげる。

夫婦となった二人。婚姻後の夜といえば初夜しよやになるだろう。

今夜はその心づもりだったので、呆気にとられてしまった。

「今日は疲れたでしょうから、ゆっくり休まれてください」

「……お氣遣い、ありがとうございます」

戸惑いながらも菜佳は橙司に一礼する。

少し安堵した自分がいた。橙司とはまだ心の壁を感じていたのだ。その状態で初夜を迎えるには心苦しい。

（ほっとしていいのかしら）

これはこれで、妻としては役割を与えられていない気もするが……

（この婚姻、橙司さまが快く思っていないのなら。跡取りは断られてしまうかも……）
橙司の御心が計り知れず、菜佳には不安のみ募ってゆく。

——静かな夜。菜佳は眠れなかった。

綺麗で暖かな布団に潜っても、新しい畳の匂いに包まれても。父の寝息が聞こえぬ部屋では心細かった。

布団から起きた菜佳は行燈あんどんを灯し、小さな裁縫箱を通り出す。矢尾板家から持ち出してきた着物のはぎれを手にし、糸を通していった。

このはぎれは母の着物だ。

淡い灯りを頼りに黙々と手を動かす。煌めく針は布を通ってゆく。
「……………」

次第に鼻の奥がつんと痛み、視界が歪んでくる。鼻を吸りながら手を止めた。
「母さん……」

母が亡くなってから四年。ずっと寂しさを押し殺してきた。父に悲しみが伝わらないよう、お客さんの前で泣かないよう、常に気丈に振る舞った。

『お前の笑顔が一番の漢方だ』

『葉佳の笑顔が母さんの一番の薬なの』

幼き頃からそう言われて育ったのだ。

（わたしの笑顔は、一番の漢方……）

だから笑顔でいなければならない。強くあらねばならない。

なのに――

頬を伝う涙は着物のはぎれへ落ちてゆく。シミのように色を濃くしていった。

「母さん……会いたいよ……会いたい……」

どうして先へ行ってしまったの。晴れ姿を見ずに行ってしまったの。

日々衰弱する母の姿を横目に父の手伝いをし、小枝のように細い手を握りしめていた。母が眠った夜には息があるか確認する。朝に自分が目覚めたときには、隣で母が

起きているか不安だった。

そんな日々を続け、買い出しから帰宅した夕暮れ。

母は息を引き取った。

最後に会話をしたのは、夕餉の献立の話。

なにを食べたいか聞けば、母はか細い声で答えるのだ。

『葉佳の、鯖の味噌煮がいい』

いつもは粥や薬膳だったのに。この日ばかりは鯖の味噌煮だった。それは何かを悟っているように思え、恐ろしかった。

『すぐ作るから、待ってね』

葉佳は家から飛び出すように買い物へ出掛けた。

母の痩せこけた頬。血色の悪い顔色と青白い唇。天を仰ぐような目。それらが頭から離れない。

買い物を済ませれば、いつものように『ただいま』と言った。

家の空気は重苦しく澱んでおり。父の表情は暗い。

母へ鯖の味噌煮は作ってやれなかった。

葉佳ははぎれを胸に握りしめ、小さな嗚咽を漏らす。

行燈の灯りに照らされ、丸めた背中が細かに震えていた。



翌日。ハルに言われた通り、家事をせずに丸一日を過ごした。しかしどうにも落着かない。夕暮れの台所。菜佳は柱の物陰からそっと顔を出す。

(……来ちゃった)

居ても立っても居られなくて、足は台所へと向かってしまったのだ。

夕餉の支度も、掃除も洗濯もこの身に染み付いている。漂う味噌汁の香り。規則正しい包丁の音。釜戸は火が爆ぜ、ぐつぐつと米を炊く。

菜佳はハルの背中を見ていた。それが母の姿に重なる。台所に立ち夕餉の支度をする母。幼き頃は「お腹空いた」と足元へ寄り、味見役をかってでた。母の手から野菜の切れ端や味噌汁を貰うのが嬉しくて。

大好きな母から学んだ料理の味が恋しく思う。

菜佳の視線に気がついたのか、ハルが後ろへ振り返ってきた。柱から顔を出す菜佳の姿を見るなり、青ざめて悲鳴をあげる。それに驚いた菜佳も短い悲鳴をあげた。だがすぐに菜佳だとわかり、安堵したハルは胸を押さえて口を開く。

「……奥様、わたくしの心臓が止まってしまいますよ……」

「ごめんなさい……」

「お腹が空きましたか。もう暫くお待ちください」

「いえ、その——」

菜佳は台所に置かれた鯖の切り身と大根の下部へ視線を寄せた。

「ハルさんの邪魔をしてしまうのは承知でお願いがあります」

ハルは菜佳の言うことを理解しているように、責めもせず次の言葉を待ってくれた。一品だけでもいいんです。作らせてもらえませんか」

二人は時が止まったように静まり返った。鍋の煮込む音だけが台所に響いている。ハルは深く息を吐けば、諦めたように言う。

「わかりました。一品だけお願いします」

菜佳は、ぱっと顔を明るくした。

大根は皮を剥き半月切りに。鯖の切り身は下処理をして置いておく。空いた時間で生姜を千切りにしていった。

「手際が良いですね」

ハルが感心したように隣から言う。

「慣れたものです。わたしは下町の娘ですから、良家の娘のような教養はなく……すみません、ハルさんに無理を言って台所に立たせてもらって」

「聞いております。白寄家が生薬を卸している漢方屋のお嬢さんなのです」
菜佳は頷く。

「このような身分のわたしが橙司さまの妻になるだなんて。身に余るご縁です」
するとハルは小さく笑う。

「わたくしにまでかしこまらなくとも、よいですよ。菜佳様は、菜佳様のままで」
そう口にしたハルの表情は、初めて見せた穏やかなものだった。

（受け入れてもらえた……のかしら）

僅かに緊張がほぐれ、菜佳は包丁を握る手元に集中し直した。

御膳に並べられた夕餉。

ハルの料理に交じる、菜佳の一品があった——鯖大根の味噌煮だ。

菜佳はちらと橙司の手元を見る。彼の箸は鯖大根の味噌煮へ手をつけ、鯖の身を一口の大きさに切っているところだ。

菜佳の箸は止まってしまい。緊張した面持ちで橙司の箸を目で追う。

鯖の身は橙司の口へと入っていった。菜佳の息が詰まる。

「……」

微かに橙司の眉が動いた。小さく咀嚼しながら、箸をもつ手を下ろしたのだ。菜佳

の脈が激しく打ちだす。

橙司の顔はハルへと向く。

「味付けを変えたのか？」

橙司の低い声に、体を硬直させた。

（口に合わないかった……?）

ハルは菜佳の顔を見てから柔らかに微笑んだ。

「味噌煮は菜佳さまが作られた品に御座います」

目を見開いた橙司が菜佳に顔を向ける。菜佳は体を萎縮しながら視線を落とす。

「わたしがハルさんに我儘を言っわがままて台所に立たせてもらったんです……お口に合わなかったでしょうか……」

静かな沈黙が続き、それが恐ろしくて肩をすくめた。

「菜佳さん」

落ち着いた橙司の声に視線を上げれば、優しく微笑む顔がそこにあった。

「味噌が甘辛くて、初めて口にしました」

それは褒めているのか。それとも遠回しに口に合わないと言っているのか。どちらとも取れる言い方に、菜佳は困ってしまう。

「お口に合わないでしたら、そう言って下さい……」

橙司は眉を下げ小さく笑う。

「美味しいですよ。俺はハルの味で育ち慣れてきたものだから、こういう味もあるのだなど。菜佳さんは、この味で育ったのですね」

どう受け取れば良いのか。橙司はあまり「美味しい」という顔には見えなかった。

「母から教わった味噌煮です。子供の頃からこれが好きなんです」

菜佳は味噌煮が盛られた器を見つめる。

母の最期には食べさせられなかったが、悲しい記憶ばかりではない。幼い頃は、鯖の味噌煮の甘く濃い味噌を、母に強請り舐めさせてもらっていた。

（母の味には敵わないけれど……）

菜佳と母を繋ぐ、大切な一品なのだ。

橙司はまた一口と、鯖の味噌煮を口にしていく。

「あの、無理しないでください」

菜佳が声をかけるも、橙司は箸を進めていた。

「美味しい……美味しいですよ、菜佳さん」

頬を緩ませている橙司だが、菜佳はその顔が涙を堪えているように見えた。

（どうして……）

橙司という男が、菜佳にはわからないでいた。



別邸へ訪れてから三日目。菜佳は橙司と共に別邸を離れていた。

二人並んで、石畳の参道を歩いている。杉や松の木が並び、春の日差しが降り注ぐ。

ここは菩提寺の境内だ――

朝餉あさげのとき。唐突に橙司は言った。

『菜佳さんのお母様に、ご挨拶をさせてはいただけませんか？』

菜佳は目を見開いて、味噌汁を飲むとした手を止める。

そのようなことを言い出すとは、思いもしなかった。

彼が軽薄な男だと言うつもりはない。ただ、必要以上に接しめせず、距離を詰め寄ることもしない男からの突然の願いに驚いていたのだ。

矢尾板之墓と刻まれた墓石。

橙司は水桶を下ろすと、柄杓ひしゃくを使って墓石へ水をかけていく。

菜佳は仏花を供えた。花屋で買った白菊と、庭先で摘んだ山吹やまぶきだ。そのまま手慣れたように、マッチで線香に火をつけ、香炉へと供える。緩やかな風に、線香の煙がそよぐ。

静かに合掌をすると、瞼を閉じた。この墓に大好きな母が眠っている。風の音さえない静けさの中で、亡き家族を思うのだ。

そっと瞼を開けば、隣に立つ橙司へと視線を向けた。

彼は美しい横顔のまま、瞼を閉じて手を合わせている。長い睫毛まつげが揺れると、琥珀色の瞳が覗いた。

「お母様にご挨拶ができて良かったです」

いつものように、橙司は柔らかな微笑みでこちらを見返してくる。

「ありがとうございます。母の墓前に来てくださって」

「いえ、当然のことです。婿養子となりましたから、これくらいのこととはしくはなく
ては」

『本気で婿養子になるおつもりで？』と言いつつもになったのを堪える。橙司の本音を聞き出す勇氣は、菜佳にはまだないのだ。

婿養子など建前で、適当に家を継がれてしまったら？

父が守ってきたものが変えられてしまったら？

菜佳は悪い方へと思考が進み始めた。

「お母様は、どのようなお人だったのですか？」

橙司が問うてくる。菜佳の思考が止まり、僅かに足元を見つめた。

「誠実で優しい母でした。家族からの反対を押し切って、父と婚姻をしたそうです。病に倒れるまでは、父を支え続けた立派な母ですよ」

そんな母親が菜佳は好きだった。

父を愛し、矢尾板堂を愛し、自分に深い愛情を注いでくれた。母が守ろうとした店だからこそ、母亡き後は、自分も矢尾板堂を守り抜きたい。

「素敵な女性だったのでしょうかね」

橙司の言葉に菜佳は深く頷く。

「はい、自慢の母です」

菜佳は仏花を包んでいた風呂敷を畳む。

その横で橙司は桶を持ち上げ、二人は墓地を離れていった。

菩提寺の境内を歩きながら、菜佳はふと聞く。

「橙司さまのご両親はどのようなお人柄なのですか？ 結納では、その……あまりお話が出来ませんでしたから」

と言うが、『あまり』どころではなく、ほぼ会話という会話をしていない。祝言は贈られたものの、人柄が知れるほど世間話もしなかったのだ。

橙司は苦笑していた。

「父は仕事に熱心ですし、当主としても立派な人で。母は気難しい顔をしてはいま

が、侍女たちからは慕われていたようです」

「なんだか他人事のような言い方だ。橙司の主観的なものではない。」

「橙司さまから見て、どのような両親なのでしょう」

「思い浮かぶのは結納の日だ。両親に対して、よそよそしい橙司の姿が浮かぶ。すると橙司は困ったように眉を寄せる。」

「明らかに葉佳から顔を背け、地面を見つめて歩くのだ。」

「……厳しい両親、ですかね……」

「葉佳は数秒待ったのだが、それ以外に言葉は続かなかった。」

（それだけ？）

他に具体的な話もなく、思い出に浸る様子もない。

「そうですか。橙司さまは御子息ですから、厳しくお育てになられたのでしょうか」

「またしても橙司は苦笑する。」

「そうですね」と、こちらに向いて眉を下げ笑うのだが、『これ以上は触れてくれるな』と訴えているようにも思えた。開きかけた幕が閉じられてしまう。

（やっぱり、あまり良い関係ではないのかしら）

「追求は拒まれ、深く聞くことはできなかった。」

「葉佳さんは、俺で良かったのですか」

橙司が歩みを止めたので、葉佳もその場に立ち止まる。

「はい。このようなご縁をいただき、わたしは身に余る思いですよ」

と本心で答えた。しかし、橙司は眉を下げるのだ。

「好いた男はいなかったのですか。もし、父からの縁談を断れずに、というのなら」

「橙司さま」

「続く言葉を遮る。」

「わたしには好いた殿方はおりませんし、弥勒さまから強要させられたわけでもございません。わたしは矢尾板堂の安寧を一番に願っておりますから」

目を細めて微笑んでみせた。

情熱的な恋愛は望んでいない。橙司からの愛情を一身に受けたいわけでもない。

矢尾板堂が存続し、父が安心できるのなら——それでいい。

「……そうですか」

橙司は息を吐くように言うのと、ゆっくりと歩き出した。

葉佳は彼の背中について歩く。

父と比べて線が細いその背中、今はまだ頼りなく思えるが、いつかは父の代わりに店に立つ男なのだ。

母が父を支え続けたように、自分も彼を支える妻であらねばならない。菜佳は強く思うのだった。



その日の夜。橙司は湯船に浸かりながら、天井を見つめた。熱い水面が揺れ、白い湯気が立ち上っている。

考えていたのは菜佳のことだ。

菜佳は氣立てが良い。ハルも好感を得ているようだ。

『真面目で思慮深い方ですね』とハルは評している。

けれど橙司は菜佳の素ぶりに、よそよそしさを感じていた。萎縮しているのか、初めて矢尾板堂で会ったときよりも大人しい。まるで借りてきた猫のよう。

菜佳との初対面——彼女が出してくれた茶を飲んだとき。

「美味しいです」と言えば、ぱつと花咲くように喜んでた。緊張したり、喜んだり、恥づかしがったり焦ったり。ころころと変わる表情が可愛らしかった。

結納の際は白晝の親族を前にして緊張しているのだろうと思っていたが。この屋敷に来てからも、表情はどこか強張っており、態度も言動も大人びている。

微笑みはすれど、ぎこちなかった。

「美味かったな、鯖の味噌煮……」

昨夜の夕餉。彼女が作ったという鯖の味噌煮。味の濃い味噌煮は初めて食べた。

最初の一口は驚いたものの、噛めば旨みが口に広がった。大根も箸を通せばすぐに崩れてしまうほど柔らかく。甘辛い味噌の味が染みていた。

（下町の娘は、皆あれほど料理ができるのだろうか）

白晝では女中が作るのだ。お品書きも品数も味つけも決められている。ハルが作る料理が、橙司がずっと口にしてきた白晝の味だ。

だが菜佳の手料理を食べたとき。心まで染み渡る温かさに、思わず涙が溢れそうになっていた。もう一度食べたくなるような、不思議な味をしていた。

——『わたしは矢尾板堂の安寧を一番に願っておりますから』

そう口にした、偽りのない真っ直ぐな瞳。

彼女が重んじるのは、両親や矢尾板堂そのものののだと理解させられた。

そして己も、矢尾板堂の後継として受け入れられているのだらう。

橙司は目を閉じ、深く息を吐く。

『これでいいのか?』と問うてくる自分がいた。

この結婚の真意を、おそらく彼女は知らない。

「俺で、いいのだろうか……」

橙司の言葉は、湯気と共に消え去ってゆく。

◇

菜佳が別邸に越してきてから四日目の朝。橙司は菜佳と矢尾板堂へ訪れた。店内では橙司を前に、勇、菜佳、三太、手代^{てだい}の二人が横一列に並んでいる。

橙司は皆の視線を一身に受け、そわそわと落ち着かないでいた。

いつもの着流しの上に身に着けている菖蒲色^{しょうぶいろ}の半纏^{はんてん}——その背中には、屋号と家紋^{かもん}が白く染め抜かれている。

「いいじゃないか。似合ってるなあ」

勇が笑顔で橙司の二の腕を叩いてきた。力強く少し痛い。

「はあ……着る男が違えば、こうも様になりますかね」

と感心しているのは、手代^{だいすけ}の大助。

「町一番の男前だ」

顎を撫でているのは、もう一人の手代である茂松^{しげまつ}だ。

三太が傍に寄ってくれば、小さく柔い手で橙司の手を握ってくる。無邪気な笑顔で

こちらを見上げた。

「白蛇さま、オレの次にかっこいいよ」

橙司の頬は自然と緩む。

「そうか。それは嬉しいな」

すっかり三太は懐き。店に来て早々に、しきりに話しかけてきた。それがまた可愛らしくて仕方がなく。弟のように相手をしてやるのだ。

ふと菜佳と視線が合うと、彼女は優しく微笑む。

「お似合いですよ、橙司さま」

照れくさい雰囲気^{おんき}が二人の間を漂った。

「橙司さまって呼んでんの？ そこは『橙司さん』だろ」

三太が茶化するように菜佳へ言う。

菜佳は顔を真っ赤にすれば、丸い顔を両手で挟んで潰した。

「あんたは黙ってなさい！」

「いたい！ いたいよ、姉さん！」

三太は手首を掴んで離そうとするも、菜佳の方が力は強かった。

姉弟のような二人のやりとりに皆が笑う。矢尾板堂が一層明るくなった。

主人の勇が手を叩けば空気は一変。隣に勇が立ち、皆を見渡した。

「さて、これから仕事だぞ。今日は忙しくなるな」

そう言って勇が体を向けてくる。それから肩に手を置くのだ。

「橙司くんは……ここに居てくれ。今日は立っているだけでいいから。お客さんにこ
挨拶して」

「は、はい……」

橙司が立たされたのは、店の出入口口の傍。

「みんなは持ち場につけ！」

勇の声に皆が散る。葉佳と一瞬だけ視線が合うも、彼女は微笑みだけで、すぐに受付台の奥へと行ってしまう。

橙司が不安げにしていれば、大きな手で背中を叩かれる。

「大丈夫だ、心配するな。挨拶してればいいんだからな」

勇は言い残し、橙司を置いて行ってしまう。

（本当にいいのだろうか……）

せめて雑用でもさせてもらえたらいい。

けれど何も知らぬ自分ができる仕事もないと橙司は理解している。

立つように言われた以上、動くことは許されなかった。それでも手持ち無沙汰で落ち着かない。

しかしこの数時間後。橙司は立たされた訳を理解することになるのだ。

——開店から数時間後。

矢尾板堂の店内は町中の人で溢れかえっていた。

橙司の周りには老若男女が取り囲んでいる。

「女みてえに白い肌だ。髪は白髪じゃないんだよな？」

「ちょっとアンタ、失礼なこと言うんじゃないよ。ねえ？」

「橙司さまと言うの？ 名前まで素敵だわ！」

「白蛇さま！ どうしてここに来たの？」

「妖族は鼻も目も耳も利くんだって、かーちゃん言ってたよ。白蛇さまも、目がい
い？ どれくらい？」

矢尾板堂に白蛇の婿が来たと、一目見ようと人が押し寄せていた。

はにかみながら橙司は対応する。

（こういうわけか……）

自分は客引きに使われたのだと悟った。



受付台のさらに奥。調合台に座る葉佳は、橙司の様子を見守っている。

白髪と白い肌には、菖蒲色の半纏がよく似合っていた。

「白蛇さま、人気者だな」

隣で薬草をすり潰している三太が言う。

葉佳は橙司から視線を外し、天秤に集中した。

「みんな新しいものの好きなのよ。数日もすれば落ち着くわ」

天秤が釣り合ったのを確認すると、粉末の薬を下ろす。

「姉さん、妬いてる？」

ニタニタと笑う三太を、葉佳は手で追い払う。

「あんたは仕事して」

「はい」と三太は離れていく。

（妬いてる……？ そんなことない。違うわ……）

胸にモヤがかかっているが、橙司が気になるからではないと、自分に言い聞かせた。

「肌も髪も白くて、異人さんみたいだわ」

若い娘の声に、葉佳は無意識に聞き耳を立てていた。

「ねえ、白歯さまって秋の豊穰祭には舞台に立たれますよね」

「奥様とはどちらでお暮らしに？」

などと声がする。会話が気になって仕方がない。

だが騒めきの中では正確に会話を聞き取れず。とくに橙司の声は低く控えめなため、他の男たちの声に交ざり聞こえにくいのだ。

「葉佳ちゃん、いい男をもらったね。これで矢尾板堂も暫くは安泰かな」

常連の男性客が受付台に身を乗り出して言う。

葉佳は笑顔を作り、薬袋を男に渡した。

「もちろん、安泰ですよ。またいらして下さい」

「おう！ 勇ちゃんにも宜しく言っといてくれよ」

男は人混みに押されながら矢尾板堂を出る。

「……いまは仕事」

葉佳は自分の頬を叩き、目の前の仕事に専念することにした。

夕暮れ鳥が鳴く頃。矢尾板堂の暖簾は下ろされた。

賑やかしかった店内も、客がいなくなり静かだ。

受付台には、風呂敷を敷いた上に漢方学の本が積まれている。